井原駅と井原デニムストア

デニムの地：井原駅

井原駅に着くと、旅行者は早速井原の文化である弓とデニムに触れることができる。

1999 年 11 月に開業した駅舎は、12 世紀の那須与一が舟の上に揚げられた扇に的中させた有名な弓射に敬意を表したデザインをしている。駅前の石造りの広場から見ると、鉄骨の曲線が弓の非対称なカーブと似たものとなっており、隆起したガラスの円錐形が、弦にかけられた矢のように中心から僅かにずれて位置している。広場の反対側には、背の高い台座の上で大きな丸い穴の開いた扇形の石が乗っているという一見何の関係もなさそうな像がある。これは、与一が放った伝説の射を連想させるもので、像の反対側遠方に立って駅の方を振り返ると、扇の開口部がガラス塔の先端を縁取り、遠くへ飛んでいく矢のような形を強調している。

駅構内にはカフェ、土産物やレンタサイクルを扱う観光サービスデスクがあるが、最も目を引くのは井原デニム店だろう。

デニムがデニムとなるより前

井原地方は江戸時代（1603～1867 年）、綿花栽培、織物、藍染めの中心地として栄

え、急速な工業化が起こった明治時代（1868～1912 年）には、手織り機は次々と大規模な機械化織機に切り替えられた。井原の工場ではさまざまな種類の布が作られていたが、「備中小倉」と呼ばれる厚手の織物は、特に学生服や作業着への利用でよく知られた。

備中小倉のうち裏白（うらじろ）と呼ばれるものは、裏が白く、表面が染められている。藍で染められることが多く、西洋のデニム布と同じ 3×1 の綾織で作られていた。1930 年までに井原で少なくとも 1 つの織物会社が「ブルーデニム」と表示された製品を販売していた記録があるが、第二次世界大戦後にアメリカンデニムが日本に再導入されたときには、井原の織工の多くはすでにこの生地を生産する基本的な技術を有していた。1970 年頃には、日本の国産デニムジーンズの約 75%が井原で作られるようになっていた。

井原デニムの現在

現在、井原にはデニム生地生産に関わる会社がおよそ 20 社ほどあり、さらに多くの地元の工房やハンドメイド雑貨店、仕立て屋がその生地をジーンズやバッグ、シャツなどに利用している。街のあちこちに、デニムが地域経済において重要であることを示す飾りや看板があるが、井原デニムストアは、この街を訪れる多くの人々にとって最初の立ち寄り先である。このお店ではオーダーメイドのデニムスーツやサイズ直しなど、既製品の販売にとどまらないサービスを提供している。

井原デニム店は駅ビルの中でもひときわ目立つ場所にあるが、2 階には井原のデニムの歴史を紹介する小さなデニム博物館があり、1 階にはデニムを使った製品作りの一部を体験できるスタジオ「ガレージ」がある。